

ジュラール水屋敷地下貯水槽

下記説明は現地にある案内板の説明文を転記したものです。

国登録有形文化財

幕末に来日したフランス人実業家アルフレッドジュラールは山手居留地 77 番・78 番の地を得ると、谷戸に湧き出る豊富な湧水を利用して、横浜港に出入りする船舶への給水事業を開始しました。「水屋敷」の名前はここに由来しています。また、ジュラールは蒸気機関



を導入した工場を建設し、フランス瓦や煉瓦・土管・タイルなどの建設資材の製造・販売もてがけていました。

この煉瓦貯蔵貯水槽は工場入口部分に位置しており、元町公園一帯が、当時のジュラール工場の敷地でした。現存する、ジュラール工場の遺構としては、この貯水槽のほか、元町公園内にもうひとつの煉瓦造地下貯水槽（「上部貯水槽」）の存在が確認されています。



アルフレッド・ジェラルド

Alfred GÉRARD

A GÉRARD'S SAW WARE WORKS, THE LATEST IMPROV. WATER, IN YOKOHAMA, N. Y. TRYBY IN MOTMACHI.

A GÉRARD'S STEAM TILT AND BRICK WORKS.

ジェラルドの工場（外観）
Gérard's Factory (Outside), 1886

「日本輸入人図説」、明治19年(1886)刊、世木水産編輯。工場内入江、左半の横の下部は現在の水屋敷の位置にあたる。標に書かれた「A GÉRARD'S STEAM TILE AND BRICK WORKS」は、蒸気機関を用いた瓦とレンガの製造所であることを示す。また、標みに記された「和蘭土製用抽水機売所」及び「A GÉRARD'S SAW WHITE IRON WORKS」の文字から、軍艦などを造船し船体木を削っていたことが知られる。図から、工場の1・2階の両方に自社製の蒸気機関がつけられていたことが、門の上に取りと投入停止を兼ねた吊り下げられた瓦が裏かかっていたことが分かる。

A GÉRARD'S STEAM TILE AND BRICK WORKS.

ジェラルドの工場（内部）
Gérard's Factory (Inside), 1886

「日本輸入人図説」、明治19年(1886)刊、世木水産編輯。

ジェラルドの肖像写真
A Gérard, 1876

明治11年(1876)頃の撮影。陸軍省属の「軍事情報」の誌として発行されたフランス人主筆の雑誌「L'Asie」に掲載された。記述に拠ると、ジェラルド、右側の肖像である。

ジェラルドの署名
A Gérard's Autograph, 1875

上の肖像の撮影のサインと1875年8月14日の日付。

A. ジェラルド年譜
A Gérard: a Brief History

天保8年(1837) フランス、ランス市にて、パン屋の父ジャン・ニコラス・ジョセフ・ジェラルド(Jean Nicolas Joseph Gérard)と自身ノース・アンソニー・ジョセフ・ルベール(Thérèse Lambert Chéry)の間に生まれる。

元治元年(1864) 山手、169番(のち188番に地番変更)で食肉など食料品の卸売供給業を営む中村半蔵ノ新戸(現在中区打鐘)に水源を確保、給水を始める。

3年(1870) この年までに山手77・78番に水観を確保

6年(1873) この年までに、山手77・78番に西洋瓦・煉瓦製造工場を建てる。また、この頃、山下居留地188番(旧169番)にジェラルド・ビルを建設(最初期の煉瓦造建築の一つ)

24年(1891) この頃、娘婿、在日中に収集した仏教・儒教・刀剣・陶器・木版刷・古銭などのコレクション約1,000点をランス市に寄贈。現在ランス市美術館(Musée Saint-Rémy)に「ジェラルドコレクション」として保存されている。工場の経営はルイ・スズール(Louis Suzor)が継承。継承の時期は不明

大正4年(1915) ジェラルド、ランス市で亡く。享年76歳。晩年は金利生活者として故郷で悠々自適の生活をおくっていた。農業技術に関する本の収集家として知られ、蔵書は遺言により遺産によって設立された「農学アカデミー」に引き継がれた。遺族相続人は秘書のジャン・ドロン(Jean Henri Charton)。

9年(1920) 工場跡地に、大正活版の印刷所が設けられる。

11年(1922) 工場跡地に、ジェラルド給水株式会社設立。

12年(1923) 関東大震災。ジェラルド給水株式会社が被災者への給水に貢献。

昭和2年(1927) 横浜市中区ジェラルドの遺族相続人ジャン・ドロンに、工場跡地の水代用設備を収容する建物を建設された。

5年(1930) 横浜青年連合会の発案により、給水を利用したプールが建設され、この年「プール」周囲一帯は公園として整備された(現在の元町公園)。

ジェラルドの水屋敷

A.Gérard's Waterworks

横浜の市街地の井戸の水は塩分を含んでいて、飲用には適していませんでした。他方、丘陵地帯の麓には豊富な湧水が多く、上水道が整備されるまでは、そうした湧水を汲んで市中を走り歩く「水屋」の姿も見られました。この頃に創設したジェラルドは、山手の麓に水源を確保し、パイプを敷設して、山下居留地や寄港船舶に供給しました。これを見た横浜の人々は、ジェラルドの給水のための施設のことを「水屋敷」と呼ぶようになりました。

「横浜実測図」(部分) Surveyed Map of Yokohama, part, 1881
明治14年(1881)刊、商務印書館刊行。

●●はジェラルドの水屋敷、●●は事務所。

ジェラルドは、まず明治元年(1868)中村半蔵ノ新戸(●●現在の中区打鐘)に水源を得て、給水業に着手します。現在の「打鐘の湧水」がこの水源の源流です。明治3年までは山手77・78番(●●現在の水屋敷)に新たな水源を確保しました。この頃「水屋敷」と呼ばれることになりました。前者からは山手居留地169番(●●のち188番に地番変更)の湧水所まで、後者からは堀川までパイプを通して給水しました。前者は山下居留地、後者は寄港船舶を対象とするものと思われます。

水屋
Water Vender, 1870
『アソシエーション』
1870年8月1日号

ジェラルドの工場（近景）
A Gérard's Factory (lower left) in the 1890's
明治20年代頃、左下の大きな建物、1階の屋根瓦が西洋瓦で葺かれている。

ジェラルドの工場（遠景）
A Gérard's Factory from a Distance, in the mid-Meiji Era
明治中期、外国人築地の敷居の下、煉瓦を中心とする洋瓦造の建物群。



明治時代の横浜港と山手

Yokohama Harbor and the Bluff in the Meiji Era

安政5年(1858)、日本はアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスの5か国と修好通商条約を結び、翌年横浜や長崎・函館を開港しました。半農半漁の村だった横浜は、これ以降国際貿易港として大発展を遂げるようになります。



【改正 銅版横浜地図 全】 Map of Yokohama, 1899 (1899年)。尾崎富五郎作製。地図中、「築地」と記されているところがジョーラルの工場跡(現在地)。

明治32年(1899)に新しい条約が実施されるまでは、幕末に結ばれた条約により、外国人の居住と営業は開港場内の居留地と称される一定の区域に限られていました。この地図の点線で囲った部分が居留地の居留地です。禁止地とが線をはる日本通りより左側、堀川までが山下居留地(現在の山下町)、堀川の左半3山手居留地です。



横浜港風景
Yokohama Harbor in the Former Part of the Meiji Era
明治初期、沖合に碇泊する外国船。横浜が開港されたのは、木保が深く大型船の碇泊に適していたことで、本牧岬によって保護から守られていたことなど、天然の良港としての条件ももっていたからで、しかし、開港当初の港湾施設は貧弱なものでした。大型船が碇泊することはできず、荷役の船との間を繋ぐ(けいけ)が往復して人を貨物を運んでいました。ジョーラルの汽船船水も手扱し船を使って行っていたことでした。



明治初期の山手風景 The Bluff in the Early Meiji Era

丘の上の主要の建物はアメリカ海軍病院。その右半は居留地に建てられた外国人職員の、その東部の原宿舎の建物が、初期のジョーラルの西洋風・煉瓦工場。山手側は明治15年(1882)居留地に編入され、外国人の住宅地として発展しますが、居留地の発展を阻むため、居留地外に、船倉、工場、製菓工場、居住外国人や居留地外のため飲食料品の生産も盛んになります。ジョーラルの船水もその一つです。



大棧橋築造前のイギリス波止場
Osanbashi Pier in the Former Part of the Meiji Era, before the Osanbashi Pier Was Built

明治初期、慶応2年(1866)の大石に拡張された後、まだ大型船が碇泊することはできず、荷役の船で運りながら行っていたから、開港当初に建設された大石(築山町)が見える。

図1は複製された写真資料による。

